かるちゃ～ナビ

ザ・見遊（みゅ～）じあむ ……50

自転車博物館 サイクルセンター（堺市）

堺の伝統的な地場産業のひとつである〝自転車〟をテーマにした博物館です。1992年に自転車の部品メーカーがつくった財団によって設立されました。世界最古のクラッシック自転車から、最新のオリンピック出場車まで、世界の自転車の発展の歴史を約50台の実物を展示して紹介しています。ブレーキや変速の仕組みを実際に体験できる展示もあり、初心者向けの自転車教室（要予約）も実施しています。展示では「世界遺産は地球規模の環境破壊で危機にあり、各人が自動車の代わりに自転車を利用しよう」と環境問題をアピールするコーナーも。博物館のある大仙公園の中には「自転車ひろば」もあり、クラッシック自転車のレプリカに体験試乗ができます。最近は国内はもとより、海外旅行でも人気が高まっているサイクル・ツアー。安全に、そして健康的に自転車を使いこなせるように、この博物館で学び、体験してみるのはいかがでしょうか。

世界最古のクラッシック車から最新のオリンピック出場車まで

古今東西の自転車を展示

ミュージアムメモ

▶所在地／堺市堺区大仙中町18－２大仙公園内▶交通／ＪＲ阪和線百舌鳥駅から徒歩10分▶開館時間／10時～16時30分▶休館日／月曜日（祝日、振休は開館）・祝祭日、振休の翌日・年末年始▶入館料／大人300円、中高生200円、子ども（３歳～小学生）・65歳以上100円／土曜日は小中学生無料、20人より団体２割引▶連絡先／072－243－3196▶駐車場／あり12台

このシネマがえいが

アンダンテ～稲の旋律

引きこもり女性と農業青年の交流

２００２年の４月に新日本出版社から出版された旭爪あかねさんの小説『稲の旋律』。若い女性の心の葛藤と再生の軌跡を、みずみずしい感性と往復書簡で描いたこの小説は第35回「多喜二・百合子賞」を受賞しました。

この話題の小説が映画になりました。それが「アンダンテ～稲の旋律」です。自身も引きこもり体験をもつ旭爪あかねさんは「同じように苦しんでいる人たちに、悩んだり苦しんでいるのはあなただけじゃないのよ、という思いでこの作品を書きました」と語ります。

いま世界は地球温暖化などの環境の悪化がいちじるしく進行し人間社会をとりまく危機が叫ばれています。この映画は、一方で豊かな物質社会のなかで、人間恐怖症と引きこもりの生活から、新たな自立の道を懸命に模索する若い女性の葛藤と再生、明日への希望を描いた作品です。

幼いころから音楽の道を歩む千華は、競争が激しい音楽社会に次第に自信をなくしていきます。そして自分自身も見失い登校拒否となり、大学も中退。職場での人間関係がうまく作れず、とうとう一日中家に閉じこもる生活に。「誰か私を助けてください」と声をあげる千華に、応えたのが農業青年の晋平です。千華と晋平の手紙の交流がはじまります…。

いま、全国で製作上映運動が展開されています。大阪では12月17日にクレオ大阪中央で完成上映会が行われます。（連絡先 TEL 06－6719－5255）

摂津 河内 和泉 おおさか三国誌 ……50

（大阪市中央区）

八軒家浜と天満橋 古代から交通の要所 大阪文化の発信の地にも

天満橋は上町台地の先端にあります。太古の昔は近くまで海が迫り、潮の流れが速く、ここから〝浪速〟の呼び名が生まれたと言われています。平安時代は〝渡辺の津〟（向かい側へ渡る「渡し場」の意味）と呼ばれ、紀州熊野詣での起点になりました。江戸時代になると、〝天満八軒家船着場〟と呼ばれ、京都と大坂を往来する三十石船が発着する交通の要所として栄えました。〝八軒家〟の名は、ここに八軒の船宿や飛脚屋があったことからついたと言われます。十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」で知られる弥次さん・喜多さんが、大坂への上陸第一歩をしるした場所であり、「あんた江戸っ子だってね、食いねえ、寿司を食いねえ～」の台詞で有名な浪花節「森の石松・三十石船」の舞台となるなど、八軒家浜は、江戸時代後期の文化の発信地点になりました。八軒家浜の風景は絵師にも好んで描かれ、歌川貞秀の「風景版画」、歌川國員（くにかず）の「浪花百景」、安藤広重の「浪花名所図絵」が、当時の賑わいの様子を今に伝えています。明治時代からは急速に近代化が進み、景観は大きな変貌を遂げました。現在は商業施設が建ち並ぶビル街になっていますが、毎年夏に催される天神祭では昔からのメイン会場でもあり、その賑わいは今も変わりません。

昔は三十石船が発着

船着場の面影を残す石段

大阪の戦跡を歩く 第49歩

十三の平和地蔵

（大阪市・淀川区）

十三のネオン街の一角にひっそりと、お地蔵さんの祠が建っています。この地には昔、「鏡が池」という大きな池がありました。明治のはじめ頃、池で愛児を溺死させてしまった母親が、わが子の供養と他の子どもたちの守護を念じて石の地蔵を祀りました。その後、水難はなくなり、世の親たちの信仰を集め、「安産の地蔵」としても知られるようになりましたが、大阪大空襲であたり一帯が焼け野原になりました。戦後、十三商店街の方々が中心になって、このお地蔵さんを「平和地蔵」と名前をつけ、平和祈願を託しています。

いまも心に響く 名詩・名歌・名語録

苦悩を突き抜けて
歓喜にいたれ

ベートーベン

日本では年末になると必ず演奏される「交響曲第９番」。第４楽章の「合唱」はシラーの「歓喜に寄す」に曲をつけたものです。ベートーベンは早くからこの詩に曲をつけようと試みていましたが、「第９」として世に出るまでには30年の月日が流れています。この間に難聴を患い、弟の死と甥の後見問題で心を悩ましました。苦悩の果てに生んだ曲です。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の
酒はしづかに飲むべかりけり

若山牧水

明治43年（1910年）、牧水が弱冠26歳の時に信州・浅間山麓で詠んだ歌です。牧水は旅を愛した歌人で、紀行文も多く記しています。旅と同じく生涯を通して愛したのが酒で、その酔醒味は「静かに一人しみじみと味わいながら飲むことだ」と表白しています。たいそうな酒豪家で、１日１升は飲んでいたそうです。